

とらうべ

地域母子保健サービスは 保健婦と助産婦の共働で

大石優子

袋井市保健センター保健婦(静岡県)

私は、市の保健センターに就職して6年目の保健婦である。ここに就職する前は、病院で助産婦として5年間務めた。保健婦に転職したのに特別な理由はなく、結婚し子供が生まれ夜勤が苦痛になったからだ。

ところで今日は、課長と職員との個人面談の日である。自分の仕事に対する評価や考え、課長に対する要望など、普段、面と向かってはなかなか言えないことを言うよい機会である。そこで私は、「保健センターに助産婦が必要だと思います。地域保健法によって、母子保健サービスの大部分が市町村に移行されるのに、今のままの体制ではやりこなすだけのサービスになってしまいます。母子保健活動を助産婦に任せたら、もっと市民に喜ばれる活動ができると思います」と、かっこよく言ってみた。しかしやはりそれだけの理由では課長に納得してもらえなかった。

「ほかの保健婦もそう思っているのかね？」そんな課長の言葉に、私は答えにつまってしまった。

そもそも私が保健センターに助産婦をと思うようになったのは、私が助産婦だったからという理由ではない。丸5年間、保健婦として働いた中で、むしろ母子保健活動は保健婦の仕事の中で一番大切だという思いを強くしていた。成人病予防の基本は、子供の頃からの生活習慣であり、それをつくるのは親である。妊娠して、親としての心構えをつくるこの時期から、成人病予防活動は始まるのだ。そんな意味からも、母子保健活動をもっと充実させたいという思いは強かったが、ほかの事業に追い

まくれ、じっくり考える余裕がなかった。

そんな悶々とした毎日の中で、私はあるきっかけで、助産婦活動を勉強するため、以前本誌でも紹介されたことのある山形県八幡町保健センターを視察する機会を得た。その活動を目の当たりにして、保健婦として、大きな石でガツンと頭を殴られたような衝撃があった。なんと、私たち保健婦が日頃なかなかできないと思っている活動が、助産婦1人の力で思い切りやれているではないか。な



によりも、共に働く保健婦たちとの息の合ったチームワークを肌で感じた。お互いの専門分野を大いに生かした奥の深い活動がそこにはあった。すぐ自分の町に置き換えて実行できるものばかりではないが、それでもなんとかこの思いを実行に移した

いと強く思った。

しかし、それにはまず保健婦の助産婦に対する認識不足に問題があった。「助産婦は、分娩介助が仕事でしょ」という言葉があたり前のように保健婦の口から出てくるのだ。助産婦と保健婦、同じ看護職でありながらお互いの仕事についてよく理解し合っていない気がする。まずこの壁を乗り越えていかないと、そして、ぜひとも助産婦は地域でこんなに活動できるというアピールを保健婦に送ってほしいと思う。私自身も、実績の中から助産婦の必要性を理解してもらえ活動を実践していきたい。そして、課長自ら保健センターに助産婦は必要だと言わせたい。最後に、助産婦活動のすばらしさを改めて教えてくださった八幡町保健センターの皆様に、この誌面をお借りしてお礼申し上げたい。